

日本語からブラジル・ポルトガル語への翻訳における「役割語」への対応手法 —漫画における「異人ことば」を例として—

Flavio DE NAZARETH FIGUEIRA

(東京外国語大学総合国際学研究所博士後期課程)

Abstract

This article analyzes how the “Japanese Role Language” is translated from Japanese to Brazilian Portuguese, taking the “Foreigner Role Language” present in two Japanese comics as the object of research. First, this article draws attention to the concept of “Role Language” and its importance in the translation of fictional works. The first comic analyzed presents the use of the “Foreigner Role Language” applied to Western characters, while the second one presents the use of the same concept applied to Oriental characters. It is noticed that not only the “Foreigner Role Language” is translated from Japanese into Brazilian Portuguese, but the methods utilized in the translation of both works are similar. The methods utilized in the translations are: “variation of formal writing to simulate accents”; “no gender agreement between determinant and determinate terms”; “no agreement of number and person between verbs and subjects” and the “non-use of articles”.

1. はじめに

日本語の代名詞はヴァリエーションが豊かであることは、すでによく知られている。例えば、一人称代名詞の「私」、「あたし」、「俺」、「僕」、「拙者」などが挙げられる。これに対し、一人称代名詞が *Eu* という単語しかないブラジル・ポルトガル語は一人称代名詞のヴァリエーションが比較して乏しいと言える。¹ そのため、日本語の代名詞のヴァリエーションは翻訳における障害の一つとして考えられる。このヴァリエーションが翻訳に与える影響について、翻訳者は意識していないわけではない。例えば、『翻訳夜話』(村上・柴田 2000: pp.52-54)では、その問題が次のように示される(下線は筆者)。

「村上 (...)レイモンド・カーヴァーの小説における一人称はだいたいにおいて、「私」にするか「僕」にするかです。「俺」はないと思うんですよね。もちろん語りの部分で「俺は—」というのはありますけれど、地の文章では「私」か「僕」です。で、正直言ってどっちでもいいんですよね。たとえば、少年時代のこと、ある

Flavio DE NAZARETH FIGUEIRA, “The methods of correspondence of the “Role Language” in translation from Japanese to Brazilian-Portuguese Language. -An analysis of the “Foreigner Role Language” in Japanese comics-,” *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No. 21, 2019. pages 41-60. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

いは若い時代のことだと「僕」のほうがふさわしい場合が多いわけだけれども、少し中年になってくると「僕」ではなじまない部分もあって、だいたい「私」になります。(…)そのへんはやはり勘です。深く考えだすと、かえってわからなくなっちゃう。」

(村上・柴田 2000 pp.52-53)

上記のように、一見すると日本語の代名詞のヴァリエーションはあまり大きな問題ではないと思われるが、実は、代名詞の選択は、その作品に見られる人物像の年齢などのような重要な要素とも関わっていることが分かる。更に、次から、作品およびキャラクターのトーンも代名詞の選択と関わっていることも分かる。

「柴田 僕も基本的にはその作品自体のトーン、あるいはそのキャラクターのトーンに従っているつもりですが、案外、何か他の要素と重ね合いで自動的に決まっちゃうことも多いですね。たとえば、男の語り手がいて、その語り手はひとまず「私」に決めているとします。で、そこに女性のキャラクターが出てきて、その人にどうしゃべらせるかを決めるうえで、「私」ではなく「あたし」にしたほうが、どの科白を誰がしゃべっているかが明確になるので、どっちでもいい場合だったら「あたし」にするとかね。あるいはこの女性は「私」がふさわしいから男のほうは「僕」にしちゃうとか。」

(村上・柴田 2000 pp.53-54)

上記のコメントから、フィクションの作品の翻訳の場合、日本語の人称代名詞のヴァリエーションにおける二つの特徴が問題になると考えられる。一つは、日本語では同一の文法的な人称を表す単語が複数存在することであり、もう一つは、同一の人称を表しながら、違う代名詞を用いることによって異なった人物像を表現することができるということである。これに関して、フィクションの作品における代名詞のヴァリエーションを単なる一つの単語のレベルとしてではなく、人物像の表現と関わっている一つの要素として捉える「役割語」(金水:2000, 2003)の概念が新しい視点を与えることができる。

単語のレベルだけでは、日本語からブラジル・ポルトガル語への翻訳に見られる上記のような代名詞の問題は解決しきれないと思われるが、「役割語」の概念を考えることにより、日本語の代名詞のように、一語ずつの問題として認識されてきたものをより広い現象として捉えることが可能となるだろう。そして、様々な言語的な特徴によって表される日本語の「役割語」は外国語への翻訳でも、他の様々な言語的な特徴をもって対応できると考えられる。

筆者の研究は日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語の翻訳では、どのような対応手法によって翻訳されているかを明らかにすることを目的とするものである。そこで、本稿では、「役割語」の一種である「異人ことば」を調査対象とし、原作に見られる「役割語」が翻訳にも影響を与えているかどうか考察しながら、その対応手法を分析する。

2. 先行研究

2.1. 「役割語」とは

「役割語」とは金水(2000)によって作られた概念であり、ある人物像と関連している言葉遣いのことを指す。金水(2003)によると、「役割語」は次のように定義される。

「ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」(金水 2003: p.205)

金水(2003)が示すように、役割語は言葉の位相と似ている点があるが、言語位相差と異なり、自然に使われている言葉遣いとして存在するわけではなく、一人一人が現実に対して持っている観念であり、「仮想現実(ヴァーチャル・リアリティー)」的な言葉遣いである(金水 2003: p.37)。²すなわち、役割語は言語上のステレオタイプである(金水 2003: p.35)。役割語の例として、次のようなものが挙げられる(下線部は筆者によって表記された)。

例1.

- | | |
|--|---|
| a. そうよ、 <u>あたし</u> が知ってるわ | e. そうですわよ、 <u>わたくし</u> が <u>存じて</u> おりますわ |
| b. そうじゃ、 <u>わし</u> が知っておる | f. そうあるよ、 <u>わたし</u> が知ってる <u>あるよ</u> |
| c. <u>そや</u> 、 <u>わて</u> が知 <u>とる</u> でえ | g. そうだよ、 <u>ぼく</u> が知 <u>ってる</u> の <u>さ</u> |
| d. さよう、 <u>拙者</u> が <u>存じて</u> おる | h. <u>んだ</u> 、 <u>おら</u> 知 <u>ってる</u> だ |

金水(2011b:p.170)

金水(2011b)は「言葉遣い(スタイル・方言)と人物像(のステレオタイプ)の心理的連合関係(に関する知識)が存在するとき、その言葉遣いのことを役割語と呼ぶのである」(2011b: p.170)と述べている。上記のように、a から h まで、それぞれ「女性」、「男性の老人」、「大阪人」、「武士」、「お嬢様」、「中国人」、「若い男性」、「田舎者」という人物像が表されている(金水 2011b: p.170)。そして下線部に見られるように、これらの人物像は様々な言語的な特徴によって表現されていることが分かる。金水(2003: pp.205-207)によると、役割語の指標として、人称代名詞、文末表現、丁寧表現、断定表現、なまり、感動詞、笑い声、アクセント、イントネーション、速度、なめらかさなどが挙げられる。

金水(2000)や中村(2013)の研究から分かるように、役割語の定着と発達において、欠かせないのがメディア(小説、新聞、漫画、映画、アニメ、ゲームなど)の存在である。金水(2000)によると、役割語の知識はメディアを通じて拡散、増幅、定着、それに固定していく(2000:p.330)。役割語を使うことは、即座に人物像を描写することができるため、情報伝達において非常に経済的な存在である。その経済性のため、メディアは役割語の知識を使い、結果的にその知識を維持していくと考えられる(金水 2000: pp.328-330、中村 2013: pp.76-80)。つまり、「メディアは役割語の

培養土であると言える」(金水 2000:p.330)。こうした役割語とメディアの関係は役割語と翻訳の関係を考えるときにも有意義である。次に、役割語と翻訳の関係について述べておきたい。

2.2 「役割語」と翻訳の関係

役割語と翻訳は緊密に関わっているといえる。その関係について、重要な視点を論じた先行研究としては、山口(2007, 2011)、金水(2011b)、中村(2013)が挙げられる。中村(2013)によると、翻訳はメディアを通して、役割語の維持と普遍化に役割を果たしている(2013: pp.71,80)。中村(2013)はジェンダー研究の視点から、翻訳によるステレオタイプまたは偏見の普及の問題に注目している。

役割語は言語上のステレオタイプであるため、偏見または差別に繋がってしまう可能性があるが、ステレオタイプそのものは必ずしも偏見・差別であるとは限らない。³しかし、翻訳と偏見の普及という問題については、十分注意する必要がある。

役割語が翻訳に果たす機能について、金水(2011b)は次のように述べている。

「役割語を適切に使用すれば、人物像や情景や作品の意図までもが、極めて効率的に表現されるであろうし、また読み手は、そういった面での安定感を求めている。しかし、ありふれた役割語に身を委ねてしまえば、作品が薄っぺらで通俗的なものに流れてしまう危険性も絶えず存在する。」

(金水 2011b:p.178)

このように、役割語は翻訳にとって重要な手法としても考えられ、その使用には有利な面もある一方で、不適切に使用されれば、作品の情景、雰囲気、キャラクターの設定を崩してしまう恐れもある。したがって、役割語の使用にそれほどの危険性があるのであれば、そもそも、なぜ役割語を使用するのか、または、その使用を考慮する必要があるのだろうかという疑問が生じるのは当然である。これに関して、山口(2007,2011)が提案するフィクション作品における「微視的コミュニケーション」と「巨視的コミュニケーション」の概念が重要となる。

山口(2011)は「巨視的コミュニケーション」と「微視的コミュニケーション」を次のように定義している。

「作品世界内の登場人物同士のやり取りは、作品という小世界内での伝達なので微視的コミュニケーション(microcosmic communication)と名付けた。これに対し、作者から読者(観客)への伝達は、作品の小世界の枠を超えるものであるので巨視的コミュニケーション(macrocosmic communication)とした。」

(山口 2011:p.29)

そして、山口(2011: p.29)は微視的コミュニケーションと巨視的コミュニケーションの関係を次の図のようにまとめている。

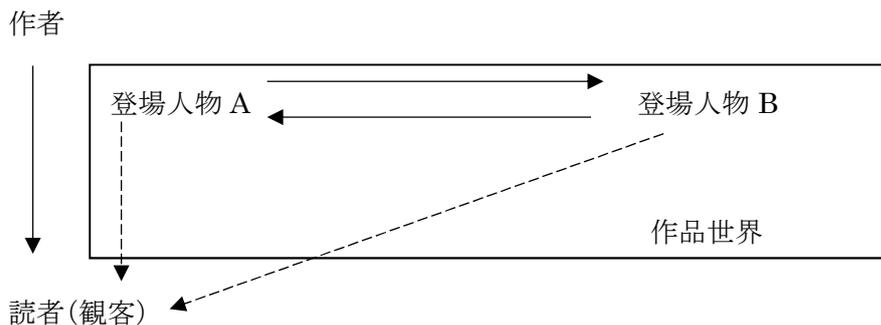


図1 フィクションの語りにおけるふたつのコミュニケーション(山口 2011:p.29)

上記の図において、登場人物 A と B の間に見られる矢印は微視的コミュニケーションを示しており、作者と読者の間に見られる矢印は巨視的コミュニケーションを示している。また、破線の矢印は「登場人物のせりふは対話者に向けられると同時に、それを傍で聞いている格好の観客にも向けられている」(山口 2011: p.29) という意味を示すものである。

山口(2007)によると、役割語は巨視的コミュニケーションのレベルと関わっている(2007:p.22, 23)。つまり、フィクション作品における役割語はキャラクターの間のコミュニケーションを表しているだけでなく、作品世界の外、即ち、読者への伝達にも関わっているというわけである。役割語は読者に対して登場人物の役割や設定などを伝えているのである。従って、翻訳の際、原作に見られる役割語に対応する要素が含まれていなければ、その作品のセリフの全体的な意味が伝えられなくなると考えられる。そのため、役割語の翻訳が重要になると考えられる。

筆者の研究は上記の役割語と翻訳の複雑な状況を踏まえて、日本語の役割語はどのような対応手法をもってブラジル・ポルトガル語に翻訳されているかを分析することを目的とする。役割語の中で、「異人ことば」は多様な人物像を含め、非常に豊富である。そのため、日本原作での使用及びその翻訳での対応の可能性が高いと考えられる。そこで、本稿では、「西洋人キャラクター」が出現する作品と「中華風キャラクター」が出現する作品に見られる「異人ことば」の翻訳を調査対象とする。ここで、翻訳の分析を始める前に、本研究の方法を簡単に紹介しておきたい。

3. 研究方法と目的

調査の対象とする作品のジャンルは、少年漫画とした。金水(2003、2007a)が述べるように、漫画というジャンルの作品には「役割語」が多く見られるとされている(2003:p.45、2007a:pp.97-98)。また、日本語の少年漫画はブラジル・ポルトガル語に多数翻訳されているため、今回の調査では、役割語の対応を確認するために、漫画作品が一番ふさわしい調査対象と判断した。

今回の調査では『サムライチャンプルー』と『鋼の錬金術師』という漫画作品に見られる「異人ことば」の翻訳を考察した。分析に際し、まず、それぞれの作品から一つまたは二つのエピソードを選択し、そこに見られる全キャラクターのセリフを収集し、データベースを作成した。次に、原作と翻訳のセリフの比較を行った。『サムライチャンプルー』の第 6 話「北の方から？」から収集されたセリフの数は 365 個であった。その中で「異人ことば」を使うキャラクターのセリフは 59 個であった。翻訳版で役割語が対応していると見られるセリフは 54 個であった。『鋼の錬金術師』の第 32 話

「東方の使者」と第 33 話「ラッシュバレーの攻防」というエピソードから収集されたセリフの数は 557 個であった。その中で「異人ことば」を使うキャラクターのセリフは 147 個であった。「異人ことば」の役割語が見られるセリフは 89 個、翻訳版で役割語が対応していると見られるセリフは 41 個であった。

以上のデータをもとに、金水(2003: pp.205-207)が挙げる役割語の言語的な特徴を参考にし、役割語のマークを 1 一人称、2 文法、3 音形の写し方、4 語彙、5 呼称、6 その他という 6 つのカテゴリーに分けて分析を行った。なお、金水(2003)が示すように、「標準語」という概念は役割語にとって非常に重要となる。⁴そのため、翻訳の中で「標準語」から体系的に離れている要素を役割語の分析の主な対象とする。次章で詳しく見ていくが、「西洋人キャラクター」が使う「異人ことば」と「中華風キャラクター」が使う「異人ことば」の間では共通点もあれば、相違点もあり、翻訳版でも、これと似たような状況が見られた。

4. 翻訳における「異人ことば」の分析

4.1. 「異人ことば」とは

金水(2003)によると、次のように「異人ことば」を三つの大きなグループに分類することができる(2003:p.182)。

- 外国人 西洋人(白人)、黒人、中国人等
- 過去の時代の人 武士、公家等
- 人でないもの 神、幽霊、妖精、宇宙人、ロボット等

上記が示すように、「異人」とは現代の日本人ではない存在として位置づけられるものをいう(金水 2003:p.182)。「異人キャラクター」の中で、「武士キャラクター」を表すためには、金水(2003)が示すように、「武士ことば」という、歴史的根拠に基づいた言葉遣いが存在する。一方で、本来日本語を話さない人たちである「外国人」などのような人物像の場合では、「言語の投影」と「ピジンの適用」という二つの方法のもと、「役割語」が用いられている(2003:pp.182-183)。

「言語の投影」とは、日本・日本語に存在している一つの言葉遣い(役割語)を、元々日本語を話さないはずの人物に用いさせることである。金水(2003)は例として、「西洋の中世の武士」という人物像ならば、「武士ことば」が投影されることや、「幽霊」や「神様」という人物像ならば、「老人ことば」が投影されることなどを挙げる(2003:pp.183,184)。

「ピジンの適用」とは、極端に単純化された日本語、文法的・音声的に崩れた日本語を「役割語」として登場させることである(金水 2003:p.187)。「アルヨことば」はピジン化した日本語の典型的な例である(金水 2003:p.187)。同様に、宇宙人、ロボット等の言葉遣いに見られる「キャラ語尾」も人工的に作り出されたピジンとして見られ、「アルヨことば」の仕組みとよく似ている(金水 2003:p.188)。そのため、「ピジンの適用」の一つの例としても考えられる。次に二人の外国人キャラクターの「異人ことば」を考察する。最初に「西洋人キャラクター」が用いる「異人ことば」を、次に「中華風キャラクター」が用いる「異人ことば」を分析する。

4.2. 西洋人キャラクターの「異人ことば」の分析

4.2.1. 原作における役割語-その①

このセクションでは『サムライチャンプルー』という作品に登場する「西洋人キャラクター」の言葉遣いを考察する。『サムライチャンプルー』は、様々の現代の要素を含めながら、ファンタジーの江戸時代を舞台とする少年漫画である。この作品には三人の主人公が登場する。クールな性格を持つ侍のキャラクター「仁」、琉球の出身で暴れ者のキャラクター「無幻」、ある人物を探している途中に、二人の主人公と一緒に旅に出ることになる明るい性格の女性キャラクター「風」である。第6話の「北の方から？」というエピソードではその三人のキャラクターが旅の途中で刀泥棒の「西洋人キャラクター」と出会う。

「西洋人キャラクター」には名前がなく、金髪で青い目をしている白人でありながらも、侍の格好をしている。「侍チャンプ」というタイトルを手に入れるために、刀を千本集めているという設定のキャラクターである。「西洋人キャラクター」は自分が「蝦夷の方から来た」日本人であると主張するが、周りのキャラクターはそれを明白な嘘として捉えており、これは物語におけるユーモアだと考えられる。「西洋人キャラクター」の言葉遣いは次のように独特である(下線は筆者)。

例 2.

外国人キャラクター 「^{アトイッポン}後一本デ^{センボン}千本！！ワシハ^{ツイ}遂ニ『サムライチャンプ』ニナレン^{ネン}ネン！！」
(『サムライチャンプルー』第2巻 p.13)

上記のように、代名詞の「ワシ」や文末表現の「ネン」が目立つ。両方とも「大阪人ことば」を表す役割語として見られる(2014: pp.150, 202-203)。この役割語の使用と日本人のふりの組み合わせはユーモアを作り出すための設定と考えられるが、その言葉遣いにはもう一つの際立つ特徴が見られる。それは例 2. のように、「西洋人キャラクター」のセリフが全てカタカナで表記されているという点である。こうした表記の選択もまた役割語と関わっていると考えられる。金水(2014)はカタカナ表記で表されている役割語について次のように述べている。

「オタク文化の中でしばしば^{じんがい}「人外」と表現される領域です。〈宇宙人語〉として「ワレワレハウチュウジンダ」のように文字であれば^マカナ^マカナで書かれ、音声であれば機械的で平板なイントネーションで話される表現があります。〈ロボット語〉も〈宇宙人語〉とよく似て、「ワタシハロボットデス」などと表現されます。」(金水 2014:p.xii)

上記に見られる〈宇宙人語〉と〈ロボット語〉は『サムライチャンプルー』の「西洋人キャラクター」の言葉遣いと同じようにカタカナで表記されている。4.1. で述べたように、「異人ことば」の分類には「外国人」、「過去の時代の人」、「人でないもの」という三つのカテゴリーがある(金水 2003: p.182)。その意味で、「外国人ことば」の「役割語」も「宇宙人ことば」、「ロボットことば」と一緒に「異人ことば」のカテゴリーに入ると考えられる。さらに、金水(2007b)は次のように述べている。

「また現在、西洋語なまりの日本語を表現する際、「ソレ、チガイマース、ワタクシ、ソナナコト、イッテマセーン」のように必ず丁寧体になる点は、アリマス型ピジン日本語の特徴を一部受け継いでいるのかもしれない。」(金水 2007b:p.208)

上記からも、「西洋人キャラクター」の役割語の特徴は、カタカナ表記により表されていることが分かる。故に、日本語のカタカナ表記も役割語を表す手法として考えられる。「異人ことば」の役割語の場合は、キャラクターの独特なイントネーションやなまりなどを強調する手法として見られる。その意味で、『サムライチャンプルー』で登場する無名の「西洋人キャラクター」の言葉遣いには二つの役割語が用いられていると考えられ、これらは次のシーンで明らかになる。このシーンで、主人公たちははじめてその「西洋人キャラクター」と出会う。他人の刀を盗む動機を聞く中で、「西洋人キャラクター」の出身も訪ねる。出身を聞かれるときの「西洋人キャラクター」の役割語の変化に注目したい(下線と太字は筆者)。

例 3.⁵

キャラクター	「役割語」	セリフ
仁(主人公)	×	a.「で・・・刀を千本狩ったらそうなれる...と?」
西洋人キャラ	大阪人ことば	b.「日本ノ常識ヤロガ!!」
仁(主人公)	武士ことば	c.「そんなルールは存在せんぞ」 「誰に吐き込まれたのか知らんが...」 「というかお前...日本人じゃないだろう 金髪碧眼」
西洋人キャラ	大阪人ことば	d.「何ヤト! ?」
西洋人キャラ	異人ことば	e. 「ニ・・・ ^(違) ニエート!! <u>ミー</u> ハメツチャニッポンジンアルヨ! ?」
仁(主人公)	×	f.「どこから来た? ...ナニ人だ」
西洋人キャラ	異人ことば	g.「ソー...アー...トエ... ^{エゾ} 蝦夷?ノー... ^{ホウ} 方カラ来マシ...タ?」
風(ヒロイン)	×	h.「方?! エゾじゃなくてもっと向こう?! ...絶対外国だ!!」
西洋人キャラ	異人ことば	i.「(...)ワ・・・ <u>ワタクシ</u> ニッポンジンデース・・・」

(『サムライチャンプルー』第2巻 pp.14-15)

例 3. に見られるように、カタカナ表記以外に、「異人ことば」のいくつかの特徴が表れている。例 3. の e では外国語として思われる「ニエート」と「ミー」や、「異人ことば」の代表である文末表現の「アルヨ」が見られる。「アリマス」については、『(役割語)小辞典』で次のように述べられている。

「(...)文末に用いられ、存在、断定などを表す動詞。動詞・形容詞・助動詞の後に直接付いて助動詞のようにも用いられる。主に、明治時代から太平洋戦争中にかけて外国人の役割語として用いられた(〈アリマスことば〉)(...)現代の作品では終戦直後に見られる程度。丁寧語を伴わない

動詞「～ある」が外国人の中でももっぱら中国人を担い、ときに西洋人の話す日本語にも用いられながら、現代まで残り続けているのと対象的である。」(金水 2014:pp.17-18)

また、「アル」についても次のように述べられている。

「使い方としては、文末の動詞終止形、動詞+「た」、動詞+「ない」、動詞+「なかった」の後ろ、あるいは形容詞、形容詞+「た」の後ろ、名詞・形容動詞語幹の後ろに「ある」を付けて用いる。(…)幕末の横浜開港場で発生した片言に起源をもつと見られるが、当時は西洋人・中国人ともに「～あります」という文末表現を用いる例の方が多く残っている。」(金水 2014:pp.20-21)

このように、例 3. の e では、「異人ことば」の「役割語」が用いられていることが明らかになる。また、例 3. の g と i に見られる「マシタ」と「デース」という丁寧表現も、「西洋語なまりの日本語を表現する際、(…)必ず丁寧体になる点は、アリマス型ピジン日本語の特徴を一部受け継いでいるのかもしれない。」(金水 2007b:p.208)という点から見ると、「異人ことば」のマークとして捉えられると考えられる。

以上から、『サムライチャンプルー』に現れる「西洋人キャラクター」の言葉遣いには「大阪人ことば」と「異人ことば」が用いられることがわかる。このキャラクターの言葉遣いは物語のユーモアを作り出すために用いられていると考えられる。今回の調査では、「大阪人ことば」に対応する要素を確認することができなかった。しかし、「異人ことば」に対して、翻訳版でもいくつかの手法による対応があると考えられる。

4.2.2. 翻訳版における役割語への対応手法-その①

ブラジル・ポルトガル語の翻訳版でもユーモアを作り出すために、次のように「西洋人キャラクター」に独特な言葉遣いが用いられていると思われる。⁶

例 4.

「^{シショウ}師匠ナンカウチノ^{キンジョ}近所^{ダオ}デ行キ倒^{スイジャクシ}レテ衰弱死シカ^{フシ}カッテテモ^ク武士ハ^{タカヨウジ}食ワネド高楊枝！！^ユ言ウテ
タデ」 (『サムライチャンプルー』第 2 巻 p.26)

例 4a.

「Quando eu conhieczer minhia mesttre, ele estarr desmaiado

CONJ 私 知り合う-INF 私の-FEM 師匠 彼 コピュラ-INF 気絶-PTCP

perrto de casa, quase morrto de anemia. Ele dizia

近く PREP 家 ほぼ 死ぬ-PTCP PREP 貧血 彼 言う- PST.IMPERF-3sg.

“samurrai” que serr samurrai, niêt comerr, mas

侍 REL.PRO コピュラ-INF 侍 “いいえ” 食べる-INF CONJ

palitarr⁷ as dentes.”

磨く-INF ART-FEM 歯

(Samurai Champloo Vol.2 p.30)

単語の表記の面では、「conhieczer」、「estarr」、「perrto」、「morrto」、「samurrai」、「serr」、「comerr」、「palitarr」はそれぞれポルトガル語の正式な表記である「conhecer (知る)」、「estar (コピュラ)」、「perto (近く)」、「morto (死んでいる)」、「samurai (侍)」、「ser (コピュラ)」、「comer (食べる)」、「palitar (磨く)」からのずれとして見られる。この独特な表記は「西洋人キャラクター」の訛りを再現するための手法だと思われる。さらに、語彙的な面から見ると、「niêt」という単語も外国語の使用と考えられる。

文法的な面から見ると、限定詞と名詞の性の不一致も目立つ。Bechara (2009) が示すように、ポルトガル語では限定詞は限定される単語の性と数に一致する (2009: pp.543-544)。しかし、例 4a.に見られる「minha* mestre (私の師匠)」という表現では、「mestre (師匠)」という単語は男性名詞にも関わらず、「minha (私の)」という所有代名詞は女性形で用いられている。この表現は本来であれば性を一致させるために、男性形の所有代名詞「meu」を「minha* mestre > meu mestre」のように変える必要がある。あるいは男性名詞の「mestre」を「minha* mestre > minha mestra」のように女性形の「mestra」に変更する必要がある。同じように、「as* dentes (歯)」のような表現では、「dentes」が男性名詞であるため、それを限定する冠詞は女性形の「as」ではなく、「*as dentes > os dentes」のように男性の「os」が用いられるべきである。

翻訳版の「西洋人キャラクター」のセリフには、もう一つの特徴が見られる。Bechara (2009) が示すように、ポルトガル語では動詞は主語の数と人称に一致する (2009: p.543)。しかし、例 4a. では、動詞の「conhecer (知る) > conhieczer*」に対応する主語は一人称の「eu (私)」であるのに関わらず、動詞が不定詞で現れている。つまり、人称と数のマークが現れない形態となっている。同じように、動詞の「comer (食べる) > comerr*」、「palitar (磨く) > palitarr*」とコピュラの「estar (コピュラ) > estarr*」と「ser (コピュラ) > serr*」に対応する主語も三人称であるが、不定詞が用いられている。不定詞を用いることで、人称と数だけではなく、時制のマークも現れない。例 4a. ではキャラクターのセリフは過去の出来事を述べている⁸ため、過去を表す形態も用いられるのは普通である。⁹

このように、翻訳版のセリフでは、標準語 (正書法を含め) から離れる表現だけではなく、非文法的な表現も見られる。Bagno (2015) によると、ある言語の母語話者はその言語の非文法的な文と文法的な文を区別することができ、その母語話者は自分の言語の文法を間違わない (Bagno: pp.176-178)。例 4a. では、非文法的な文が再現されていると思われる。このような非文法的な文を人工的に作ることによって、翻訳でも原作に見られる「異人ことば」の役割語への対応が行われていると考えられ、この手法は、役割語の対応手法と考えられる。このような独特な言葉遣いは翻訳版に見られる「西洋人キャラクター」の全てのセリフにも表れている。

例 5.

「ソノ刀^{カタナ}ア貰^{モラ}ウデ！！」

(『サムライチャンプルー』第2巻 p.15)

例 5a.

「mas seu espada vai serr minhia!!」
 CONJ あなたの-MAS 刀 AUX 行く-3sg. コピュラ-INF 私の-FEM

(Samurai Champloo Vol.2 p.19)

例 6.

「アホカ!! (...) アンナモンニ ヤラレルワケ アレヘンガナ!」

(『サムライチャンプルー』第2巻 p.24)

例 6a.

「beberr?! (...) atcharr que "aquilo" poderr me derrotarr? Impossível!」
 飲む-INF 思う-INF CONJ あれ できる-INF 私 倒す-INF 無理

(Samurai Champloo Vol.2 p.28)

例 5a.では「表記のずれによる音訛の再現」として、名詞の「espada(刀) > *espadzia」、コピュラの「ser(コピュラ) > *serr」、所有代名詞の「minha(私の) > *minhia」が見られる。「限定詞と名詞の性の不一致」として、所有代名詞の「seu(貴方の)」が見られる。限定されている名詞の「espada」は女性名詞であるため、それを限定する所有代名詞は男性の「seu」ではなく、女性の「sua」が用いられるべきである。つまり、正しくは「*seu espada > sua espada」のようになる。

例 6a.では、「表記のずれによる音訛の再現」として、動詞の「beber (飲む) > *beberr」、achar (思う) > atcharr*、「poder (できる) > *poderr」、「derrotar (倒す) > *derrotarr」が見られる。文法的な面では、「動詞の活用の不一致」として「beber (飲む)」、「achar (思う)」、「poder (できる)」が見られる。聞き手が主語と思われるため、動詞は不定詞ではなく、三人称に一致する活用に変更するはずである。¹⁰ このように、テンスも合わせて書き直すと、正しくは「beber (飲む INF) > bebeu(飲む-PST 3sg.)」、「achar(思う-INF) > achou(思う-PST 3sg.)」、「poder(できる-INF) > podia(できる-PST-IMPERF 3sg.)」(または「poder(できる-INF) > poderia(できる-COND 3sg.)」)のようになる。

最後に、翻訳におけるもう一つの際立つ表現について考えたい(下線は筆者)。

例 7.

「ワ・・・ワタシニッポンジンデース・・・」

(『サムライチャンプルー』第2巻 p.15)

例 7a.

「mi...mim serr japoniês...」
 私-OBL コピュラ-INF 日本人

(Samurai Champloo Vol.2 p.19)

例 7 の、「西洋人キャラクター」の言葉遣いには、丁寧体と長音が見られる。このような用法は西洋人のキャラクターを表す役割語である(金水 2007b:p.208)。カタカナ表記以外の「異人ことば」を強調する要素だと考えられる。翻訳版でも、「異人ことば」の強調への対応が見られる。例 7a.では、他の例と同じように「表記のずれによる音訛の再現」(「ser(コピュラ) > *serr」、

「japonês (日本人) > *japoniês」)と「動詞の活用の不一致」(*ser (INF) > sou (1sg.))が確認できるが、加えてもう一つの要素が際立っている。それは一人称代名詞「mim」の使用である。

Leitão (2007) が示すように、ポルトガル語にラテン語から受け継いだ特徴として、人称代名詞の直格 (reto) と斜格 (obliquo) の区別がある (2007: pp.76-77)。翻訳の他の例が示すように、主語を表す代名詞としては、「eu (私-直格)」が用いられているが、ここでは、主語を表すために、「mim (私-斜格)」が用いられている。翻訳版から収集された例の中で、この用法は 1 回しか見られない。そのため、例7に見られる「異人ことば」の強調に対応する手法として考えられる。そして、この手法は次に見る「中華風のキャラクター」の「異人ことば」の翻訳にも現れている。

以上、上記の例から見えるように、翻訳も日本語の「異人ことば」に対応していることが明らかになる。その対応手法として、主に三つの手法が見られる。これは「表記のずれによる音訛の再現」、「限定詞と名詞の性の不一致」、「主語と動詞の活用の不一致」である。この三つの手法によって、翻訳は非文法的な文を人工的に再現していると考えられる。人工的に再現するのは、翻訳の文の意味解説において障害にならない程度で、文法的な逸脱を意図的に作るということである。

単語の正式な表記にずれがあっても、単語の本来の形式を解釈できないほど変化しているわけではない。また、冠詞などのような限定詞の性の不一致も文の解釈の障害にならない。更に、不定詞の使用により、テンスなどを表すマークがなくなる場合でも、例 4a. のように、少なくとも一つの動詞 (dizia (言う- PST.IMPERF-3sg.)) はテンスを表しており、接続詞や副詞などによっても、動詞を何のテンスに活用すべきかを予測できる。こうした意味で、翻訳は人工的に非文法的な文を再現している。そして、原作に見られる「異人ことば」の役割語が、翻訳版でも対応されていると考えられる。

4.3. 中華風キャラクターの「異人ことば」の分析

4.3.1 原作における役割語-その②

このセクションでは『鋼の錬金術師』という作品に登場する「中華風キャラクター」の人物が用いる言葉遣いを考察する。『鋼の錬金術師』という漫画は近代ヨーロッパをイメージとする「アメストリス」という架空の国を舞台とするファンタジー物語である。錬金術の失敗によって体の一部をなくしてしまった兄弟が自分の体を治すために、旅に出るといった物語の作品である。ここで観察する第 32 話「東方の使者」と第 33 話「ラッシュバレーの攻防」というエピソードでは、帝国時代の中国をイメージとする「東の大国シン」という架空の国から来たキャラクターが登場する。

金髪でヨーロッパ人のような外見の主人公兄弟と比べると、外国から来たキャラクターたちはアジア風の衣装を身に着け、アジア人風の外見をしている。さらに、カンフーのような武術もできるという面も持っている。次に考察するキャラクターは、貴族の少女である「メイ・チャン」、貴族の少年である「リン・ヤオ」、貴族の護衛として勤める老人の「フー」と女性の「ランファン」であるが、以下示すようにこの 4 人のキャラクターが用いる言葉遣いには一つの共通点がある(下線は筆者)。

例 8.

メイ・チャン「私は ^{わたし}メイ・チャン こっちはシャオメイ シンから来ましタ」
 (『鋼の錬金術師』第 8 巻 p.91)

例 9.

リン・ヤオ「いやー 生き返った 生き返っタ!!」 (『鋼の錬金術師』第 8 巻 p.113)

例 10.

フー「ぬッ・・・貴様も逆らウカ」 (『鋼の錬金術師』第 8 巻 p.130)

例 11.

ランファン「め・・・・・・・・面を返セ」 (『鋼の錬金術師』第 8 巻 p.155)

上記のように、4 人のキャラクターの言葉遣いには文法の単純化などのような目立つ特徴は見られないが、共通して、文の最後の文字が必ずカタカナで表記されている。この特徴は 4.2. に見られた「西洋人キャラクター」の言葉遣いと似ている。4.2. と異なり、全ての文字ではなく、セリフの最後の文字だけがカタカナで表記されているという違いはあるが、同じように音訛を再現する手法として用いられていると考えられる。さらに以下の場面では、「中華風キャラクター」の訛りが強調されている(下線は筆者)。

例 12.

キャラクター	役割語	セリフ
リン・ヤオ	「異人ことば」	a.「あんた方命の恩人 <u>ダ</u> !! ありが <u>ト</u> ! (...) 異国で触れる人情・・・ありが <u>たい</u> ね <u>エ</u> 」
アルフォンス(主人公)	×	b.「外国の人? 少な <u>まり</u> が・・・・・・・・」
リン・ヤオ	「異人ことば」	c.「そう! シンから来 <u>タ</u> 」

(『鋼の錬金術師』第 8 巻 pp.114-115)

例 12 の b を見ると、話し手の訛りはキャラクターの設定の一部になっていることが分かる。しかし、「中華風キャラクター」同士の会話のシーンになると、次のように、セリフの最後の文字のカタカナ表記が現れなくなる。

例 13.

キャラクター	セリフ
フー(護衛)	a.「失態申し訳ありません若!」
リン・ヤオ(貴族の人)	b.「ああ いいよ!」 「しかし 行きだおれたおかげで面白いのと出会えたよ」 「気づいたか?」
フー(護衛)	c.「・・・・・・・・あの鎧・・・・・・・・生きた人間ならば持っているはずの“ <u>気の流れ</u> ”が感じられません」

(『鋼の錬金術師』第 8 巻 pp.159)

例 13.に見えるように、「中華風キャラクター」が自分の言語で話すとき、表記の特徴が見られなくなる。つまり、「異人ことば」の役割語を表すために、セリフの最後の文字にカタカナ表記が用いられていると考えられる。

4.3.2. 翻訳における役割語への対応手法-その②

翻訳でも原作に見られる「異人ことば」に対応している要素があると考えられる。次の例から、上記の 4 人の「中華風キャラクター」の内、「フー」というキャラクター以外に、全て独特な言葉遣いが用いられていることが分かる。

例 14.

メイ・チャン「おかげさまで助かりましタ！」 (『鋼の錬金術師』第 8 巻 p.90)

例 14a.

メイ・チャン「Muito obligada! O senhor salvou a minha vida!」
とても ありがたい ART あなた(敬称) 助ける-PST-3sg. ART 私の 命

(*Fullmetal Alchemist* Vol. 16 p.12)

例 15.

リン・ヤオ「あ・・・おっちゃんデザート追加ネ」 (『鋼の錬金術師』第 8 巻 p.132)

例 15a

リン・ヤオ「Ah... quero uma soblemesa, tio.」
INTJ. 欲する-1sg. ART デザート おじさん

(*Fullmetal Alchemist* Vol. 16 p.54)

例 16.

ランファン「壊した面をかつ.....かか返せと言っていル！」 (『鋼の錬金術師』第 8 巻 p.155)

例 16a.

ランファン「A máscala que você queblou... d-devolva logo!」
ART 仮面 REL.PRO あなた 壊す-PST-3sg. 返す-IMP-3sg. すぐ

(*Fullmetal Alchemist* Vol. 16 p.77)

上記のセリフでは、文法的や語彙的な特徴は見られないものの、いくつかの単語の表記が際立つ。例 14a.では、「obligada」という単語は正書な表記のずれとして見られ、「obrigada (ありがとう) > *obligada」のように文字 *r* の代わりに文字 *l* で表記されている。例 15a.でも同じように「soblemesa」という単語の表記は正書ではなく、「sobremesa (デザート)> *soblemesa」のように文字 *r* の代わりに文字 *l* で表記されている。例 16a に見られる「máscala」、「queblou」という単語も正書の表記で用いられていなく、「máscara*(仮面)=> máscala」と「quebrou(壊れる-PST 3sg.) => *queblou」のように、文字 *r* の代わりに文字 *l* で表記されている。

セリフに現れる全ての文字 *r* が文字 *l* に入れ替わっているわけではないが、文字 *r* から文字 *l* への変化は「中華風キャラクター」の音訛を再現する手法として考えられる。一方、例 13 で考察した会話のシーンの翻訳を見ると、原作と同じように、「中華風キャラクター」の音訛のマークは現れなくなることが分かる。

例 13a.

キャラクター	翻訳版
フー(護衛)	a.「<perdoe -nos pela falha, jovem <u>mestre</u> .>」 ¹¹ 許す-IMP-3sg. 私たち PREP+ART 失敗 若い マスター
リン・ヤオ (貴族の人)	b.「<Ah, tudo bem>」 ああ 全部 良い 「<Se eu não tivesse desmaiado de CONJ 私 NEG AUX ある-SJV PST.IMPERF 気絶する-PTCP PREP fome na rua, não teria encontrado 飢え PREP+ART 道 NEG AUX ある-COND 1sg. 会う-PTCP essa dupla interessante.>」 この 二人組 面白い 「<E vocês <u>repararam</u> numa coisa?>」 CONJ あなたたち 気づく-PST 3pl. PREP+ART もの
フー (護衛)	c.「<...Aquele rapaz de armadura... não consegui あの 男性 PREP 鎧 NEG できる-PST-1sg. sentir o "fluxo do ki" presente em 感じる-INF ART 流れ PREP+ART 気 存在する(ADJ) PREP qualquer ser humano vivo.>」 だれでも 人間 生きている(ADJ)

(Fullmetal Alchemist Vol. 16 pp.81)

例 13a.に見られるように、「teria (ある -COND 1.sg)」、「encontrado (会う-PTCP)」、「interessante (面白い)」、「repararam(気づく-PST 3pl.)」などのような文字 *r* が現れる単語においては文字 *l* が代わりに用いられていない。翻訳版では、その代わりに、「< >」の印によって、「中華風キャラクター」が自分の言語で会話をしていることを強調しており、翻訳も原作に見られる「異人ことば」に対応していることが分かる。

それに加え、以下のセリフに見られる言葉遣いも非常に独特である。物語の中で、「中華風キャラクター」が食事代を支払うことを避けるために、主人公たちをだまそうとするシーンがある。次の例はこのシーンから取られたものであり、「異人ことば」の役割語の表現が明らかに見てとれる。

例 17.

リン・ヤオ「ワタシ コノ国ノ言葉ワカラン アルヨー！サイナラー！」

(『鋼の錬金術師』第 8 巻 p.157)

例 17a.

リン・ヤオ「Mim não entender língua nessa país! Adiós!」

私 OBL. NEG 分かる-INF 言語 この-FEM 国 さようなら

上記は、例 7. で考察した「西洋人キャラクター」のセリフと共通している点が多いと思われる。ここでも、セリフがカタカナで表記されており、これは「中華風キャラクター」の音訛を再現するために用いられていると考えられる。さらに、「異人ことば」の役割語の代表的な文末表現「あるよ」が見られる。4.2.1. でそれについて少し述べたが、「あるよ」という文末表現に関して、『〈役割語〉小辞典』では、「戦前から戦後を通じて、中国人をする表象する役割語の一部として多く用いられた。」と述べられている(金水 2014:p.21)。通常、この役割語は中国人の言葉遣いを表すために用いられているが、ここではこの役割語の人工性がコミカルな要素となっているといえる。

翻訳版のセリフでも、こうした役割語への対応が見られる。語彙的な特徴として、外国語の「Adiós(さようなら)」という単語が見られる。これはスペイン語の単語と思われ、ポルトガル語の言葉ではない。文法的な面では、文法が単純化されている。「動詞の活用の一一致」が見られ、動詞の「entender (分かる-INF)」が一人称に一致する形態の「entendo (分かる-1sg.)」に活用するはずのところ、不定詞で用いられている。

さらに、「限定詞と名詞の性の不一致」も見られる。本来、「*dessa país」ではなく、「desse (このpaís (国))」のように、名詞と限定詞の性が一致するはずである。しかし、男性名詞である「país (国)」という単語に、「dessa (この)」という限定詞が女性の形態で用いられている。更に、「冠詞の欠落」も見られる。動詞の「entender (分かる-INF)」の後に、名詞の「língua (言語)」を限定する冠詞「a (ART)」が用いられるはずであるが、その冠詞は現れていない。また、代名詞「mim (私-斜格)」の用法も見られる。4.2.2. の例 7a で述べられたように、一人称代名詞の「mim」は斜格を表すときに用いられる形態である。例 17a.では、本来主語を表す代名詞として、「mim (私-斜格)」ではなく、「eu (私-直格)」が用いられるはずである。

上記の考察をまとめると、『鋼の錬金術師』の翻訳に見られる「表記のずれによる音訛の再現」の表記の特徴や「動詞の活用の一一致」、「限定詞と名詞の性の不一致」、「冠詞の欠落」の文法的な特徴などは、原作に見られる「異人ことば」の役割語の対応手法として考えられる。このような手法は 4.2. で考察した『サムライチャンプルー』の翻訳版にも共通しているところが多い。ここでは、ブラジル・ポルトガル語の翻訳が「異人ことば」の役割語に対応していることが明らかとなった。

5. まとめ

役割語は物語の雰囲気やキャラクターの設定を作る重要な要素として考えられる。そのため、翻訳では原作のセリフの意味を損ねないように、役割語に対して配慮する必要がある。本稿では、日本語の役割語がフィクションの作品に与える影響に注目しながら、「異人ことば」の役割語がどのようにブラジル・ポルトガル語に翻訳されているかを考察した。最初に調べた作品では、「西洋人キャラクター」に対して「異人ことば」の使用が確認でき、翻訳版でも、その言葉遣いへの対応が確認できた。また、次に調査した作品でも同様に「中華風キャラクター」が用いる「異人ことば」を確認でき、翻訳版でもその言葉遣いへの対応が確認できた。

原作で見られる「西洋人キャラクター」と「中華風キャラクター」の言葉遣いには共通している特徴があることが分かった。両方の作品ではカタカナ表記の使用が音訛を再現する要素として見られる。また、典型的な「異人ことば」の「アルヨことば」の使用も見られた。これに対して、翻訳で見られる役割語への対応手法は共通している点もあれば、少し異なっている点も見られる。異なっている点として、双方ともに表記のずれは見られるが、「西洋人キャラクター」の言葉遣いに対しては、文字 *r* の複製や文字 *z* または、文字 *t* の追加が見られるのに対して、「中華風キャラクター」に対しては、文字 *l* が文字 *r* の代わりに用いられていることが挙げられる。さらに、「中華風キャラクター」の言葉遣いでは「冠詞の欠落」も見られる。一方で、共通している役割語への対応手法としては、「動詞の活用の不一致」と「限定詞と名詞の性の不一致」が挙げられる。

このように、今回の調査で観察された原作における日本語の「異人ことば」に対して、翻訳では様々な対応手法が用いられていることが分かった。これらの対応手法がブラジル・ポルトガル語に存在する役割語と関わっている可能性がある。特に、「中華風キャラクター」のセリフの翻訳に見られる文字 *r* と文字 *l* の変更がブラジル・ポルトガル語に存在する中国人の役割語と関わっていると思われる。しかし、この「役割語」がブラジルの社会の中でどのように生まれてきたか、どのように普及されてきたか、またどのようなイメージと関わっているかという問題に答えられるように、ブラジル・ポルトガル語における役割語の研究が必要になるため、本研究の範囲を超える。そのため、今回の調査では触れないことにした。しかし、いずれにせよ、日本語の役割語への対応手法を明らかにすることによって、翻訳に関するいくつかの問題の解決に貢献することもできれば、今後のブラジル・ポルトガル語における役割語の研究にも手がかりを与えることもできるだろう。

.....

【著者紹介】

デ ナザレ フィゲイラ フラヴィオ (DE NAZARETH FIGUEIRA Flavio) 東京外国語大学総合国際学研究所国際日本専攻博士後期課程。研究分野: 役割語、日本語—ブラジル・ポルトガル語の翻訳。

.....

【注】

1. 斜格の *Me*, *Mim* という形態を除く。
2. 金水 (2000) は、「自分をどのように見せたいかという選択を行っているとするれば、それは役割語を自ら衣装のように身にまとっているのである。」(2000:p.330)と述べている。つまり、役割語は日常会話でも使用されることが可能である。金水 (2003:pp.127-128) はそれを「仮面 (ペルソナ) としての役割語」と呼ぶ。
3. ステレオタイプについて、金水 (2003) は次のように述べている。
「ステレオタイプとは、混沌とした外界を整理しながら把握していく人間の認知特性と結びついた現象であるといえよう。認知とはすなわち外界に関する知識の処理のことをいうのである。一方、ステレオタイプに関する知識が一定の感情 (主として否定的感情) と結びつくとき、その知識と感

情のセットこそが「偏見」であるといえる。また、偏見が特定の行動と結びついて、偏見を持たれた人間にとって不当な結果を招くとき、その行動を「差別」という。」(金水 2003: p.35)

このように、ステレオタイプは偏見または差別に繋がってしまう恐れがあるが、本来、偏見と差別と区別され、人間の認知的な処理の自然な現象として考えられる。

4. 金水(2003)によると、「標準語」は役割語として「他の役割語の基準となる」(2003:p.64)という。そして、「現実の社会に現象として現れる言語としてではなく、われわれの概念・知識として捉える」(2003:p.64)と考えられる。その意味で、役割語の「原点、基準点のような性質をもっている(...)」(金水 2003: p.67)と考えられる。ブラジル・ポルトガル語から見ると、Bagno(2016)が述べる「共通規範(Norma-Padrão)」の概念が有用である。Bagno(2016)にとって、「共通規範(Norma-Padrão)」は規範文法の伝統によって普遍された言語イデオロギーである(2016:p.319)。そのため、翻訳で *Norma-Padrão* から体系的に離れる要素が「役割語」の対応として働く可能性が高いと筆者は考える。
5. 会話の一部は省略されている。
6. 例文のルビに見られる表記に関して、次のような凡例が挙げられる。
1 = First person 一人称 / 3 = Third person 三人称 / ADJ = Adjective 形容詞 / ART = Article 冠詞 / AUX = Auxiliary Verb 補助動詞 / CONJ = Conjunction 接続詞 / COND = Conditional 条件法 / FEM = Feminine 女性 / IMP = Imperative 命令法 / IMPERF = Imperfect 未完了 / INF = Infinitive 不定性 / INTJ = Interjection 感動詞 / MAS = Masculine 男性 / NEG = 否定辞 OBL = Oblique case 斜格 / pl = Plural 複数 / PST = Past 過去 / PREP = Preposition 前置詞 / PRF = Perfect 完了 / PRO = Pronoun 代名詞 / PTCP = Participle 過去分詞 / REL.PRO = Relative pronoun 関係代名詞 / sg = Singular 単数 / SJV = Subjunctive 接続法
7. *Palitar* は「爪楊枝で歯の汚れをとる」という意味の動詞である。
8. 動詞「*dizia* (言った)」が表すテンスから見れば、それは明らかになる。
9. Bechara(2009)が示すように、過去の出来事を述べるために現在のテンスを用いることもある。その場合は歴史的現在という(2009:p.276)が、例 4.a はそれに当てはまらない。
10. ポルトガル語では典型的な二人称代名詞 *Tu* に対して、二人称を表しながら、敬称の *Vossa Mercê* を由来とし、三人称の活用パラダイムで動詞と一致する *você* という表現がある。他のセリフでは、そのキャラクターが使用する代名詞は *você* である。そのため、ここも動詞がその単語に一致し、活用すると考えられる。
11. この印は翻訳版に見られる注釈のマークである。翻訳版では「*Traduzido da língua de Xing」と書かれており、「シンの言語からの翻訳」という意味である。この「注釈」は外国人キャラクターの言葉遣いに音訛のマークが表れない理由を説明するために書かれたと考えられる。「< >」という印も翻訳版に書かれている。

【参考文献】

ウスティノフ・ミカエル(2003, 2007)服部雄一郎[訳](2008)『翻訳-その歴史・理論・展望』白水社
大澤吉博(1997)「正しい翻訳とは」川本皓嗣・井上健[編]『翻訳方法』(pp.129-142)東京大学出版局

- 菊澤季生(1933)『国語位相論』明治書院
- 金水敏(2000)「役割語深求の提案」佐藤喜代治[編]『国語論第8集 国語史の新視点』(pp.311-351) 明治書院
- 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
- 金水敏[編](2007a)「近代マンガの言語」『役割語研究の地平』(pp.97-108)くろしお出版
- 金水敏[編](2007b)「役割語としてのピジン日本語の歴史素描」『役割語研究の地平』(pp.193-210)くろしお出版
- 金水敏(2010)「現代日本語の「役割語 ステレオタイプ的話体の研究」」南雅彦[編]『言語学と日本語教育 VI』(pp.1-7)くろしお出版
- 金水敏[編](2011a)「現代日本語の役割語と発話キャラクタ」『役割語研究の展開』(pp.7-16)くろしお出版
- 金水敏(2011b)「翻訳における制約と創造性—役割語の観点から—」杉藤美代子[編]『音声文法』(pp.169-180)くろしお出版
- 金水[編](2014)『役割語小辞典』研究社
- 定延利之(2007)「キャラ助詞が現れる環境」金水敏[編]『役割語研究の地平』(pp.27-48)くろしお出版
- 田中章夫(1999)『日本語の位相と位相差』明治書院
- 中村桃子(2013)『翻訳がつくる日本語』白澤社
- 松井豊・上瀬由美子(2007)『心理学入門コース5 社会と人間関係の心理学』岩波書店
- 村上春樹・柴田元幸(2000)『翻訳夜話』文藝春秋
- 山口治彦(2007)「役割語の個別性と普遍性-日英の対照を通して-」金水敏 [編]『役割語研究の地平』(pp.9-25)くろしお出版
- 山口治彦(2011)「役割語のエコロジー」金水敏 [編]『役割語研究の展開』(pp.27-47)くろしお出版
- 吉村和真(2007)「近代マンガの身体」金水敏 [編]『役割語研究の地平』(pp.109-122)くろしお出版
- AZEREDO, José Carlos de. (2008). *Gramática Houaiss da Língua Portuguesa* (2.ed.). São Paulo: Publifolha.
- BAGNO, Marcos. (2015). *Preconceito Linguístico* (56.ed.). São Paulo: Parábola Editorial.
- BECHARA, Evanildo. (2009). *Moderna Gramática Portuguesa* (37.ed.). Rio de Janeiro: Nova Fronteira.
- ECO, Humberto. (2011). *Quase a mesma coisa*. (AGUIAR, Eliana, Trans.) Rio de Janeiro: BestBolso. (Original work published 2003)
- LEITÃO, Luiz Ricardo. (2007). *Gramática Crítica- O culto e o coloquial no português brasileiro*. Rio de Janeiro: Oficina do Autor.
- MUNDAY, Jeremy. (2016). *Introducing translation studies: theories and applications* (4.ed.). New York: Routledge.
- NIDA, Eugene A. (1964). *Toward a science of translating-with special reference to principles and procedures involved in Bible translating-*. Leiden: E.J. Brill.

MOLLICA, Maria Cecilia. & BRAGA, Maria Luiza. (ed.) *Introdução à Sociolinguística-O tratamento da variação-* (4.ed.). São Paulo: Editora Contexto.

PERINI, Mário A. (2010). *Gramática do português brasileiro*. São Paulo: Parábola editorial.

【資料文献】

荒川弘 (2004) 『鋼の錬金術師』 第 8 巻 スクエア・エニックス

マンガローブ・ゴツボマサル (2004) 『サムライチャンプルー』 第 2 巻 角川書店

ARAKAWA, Hiromu. (2004). HAYASHIDA, Karen Kazumi. [訳] (n.d.). *Fullmetal Alchemist*. Vol. 16. São Paulo: Editora JBC

GOTSUBO, Masaru & MANGLOBE. (2004) SADA, Drik. [訳] (2006) *Samurai Champloo*. Vol. 2. São Paulo: Panini Brasil Ltda.